

ひがしゆげ ゆげのみや
東弓削遺跡（推定由義宮跡東限地区）発掘調査
現地説明会資料

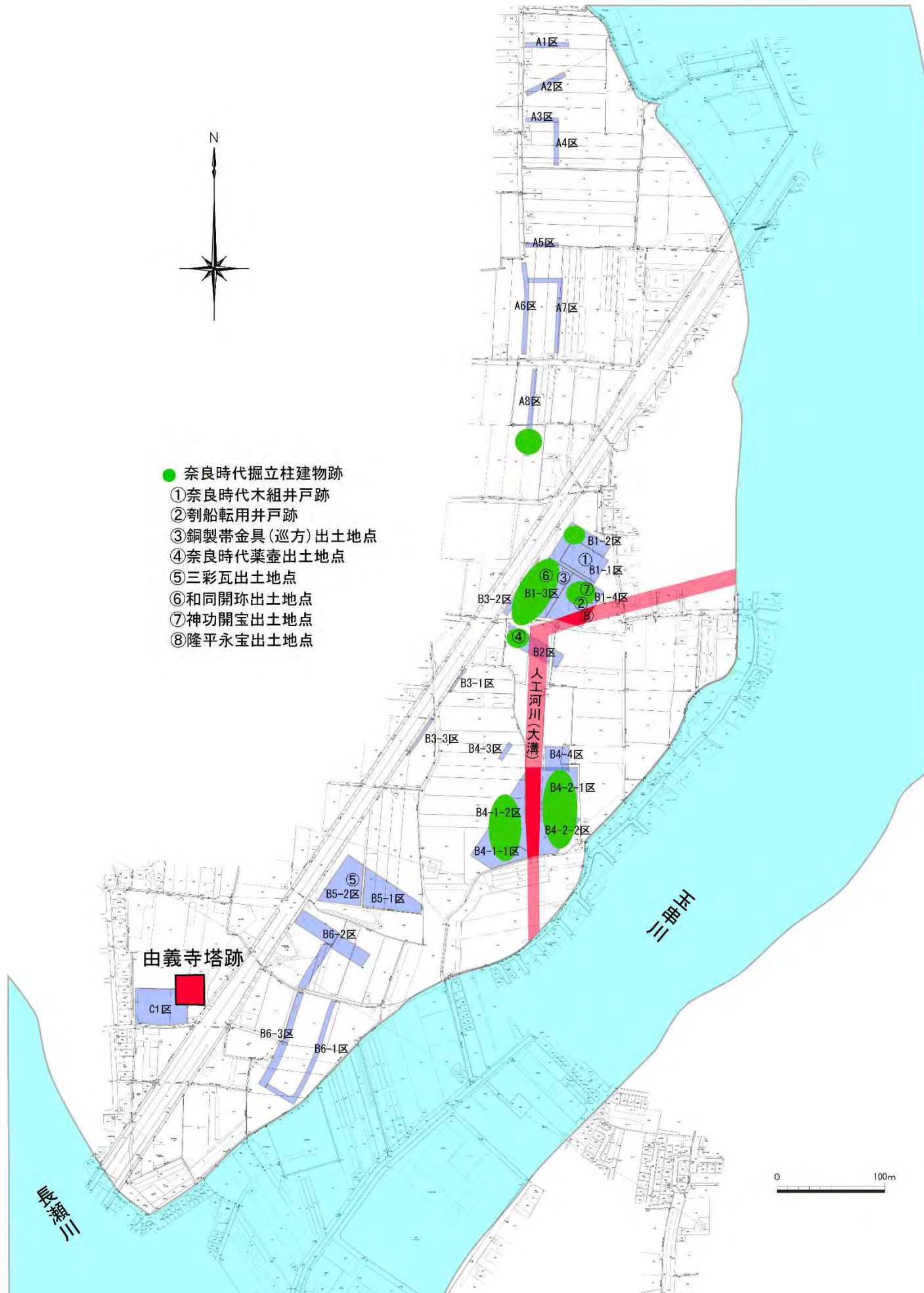
八尾市教育委員会・公益財団法人八尾市文化財調査研究会
 平成29年8月20日（日）

1. 調査の経緯

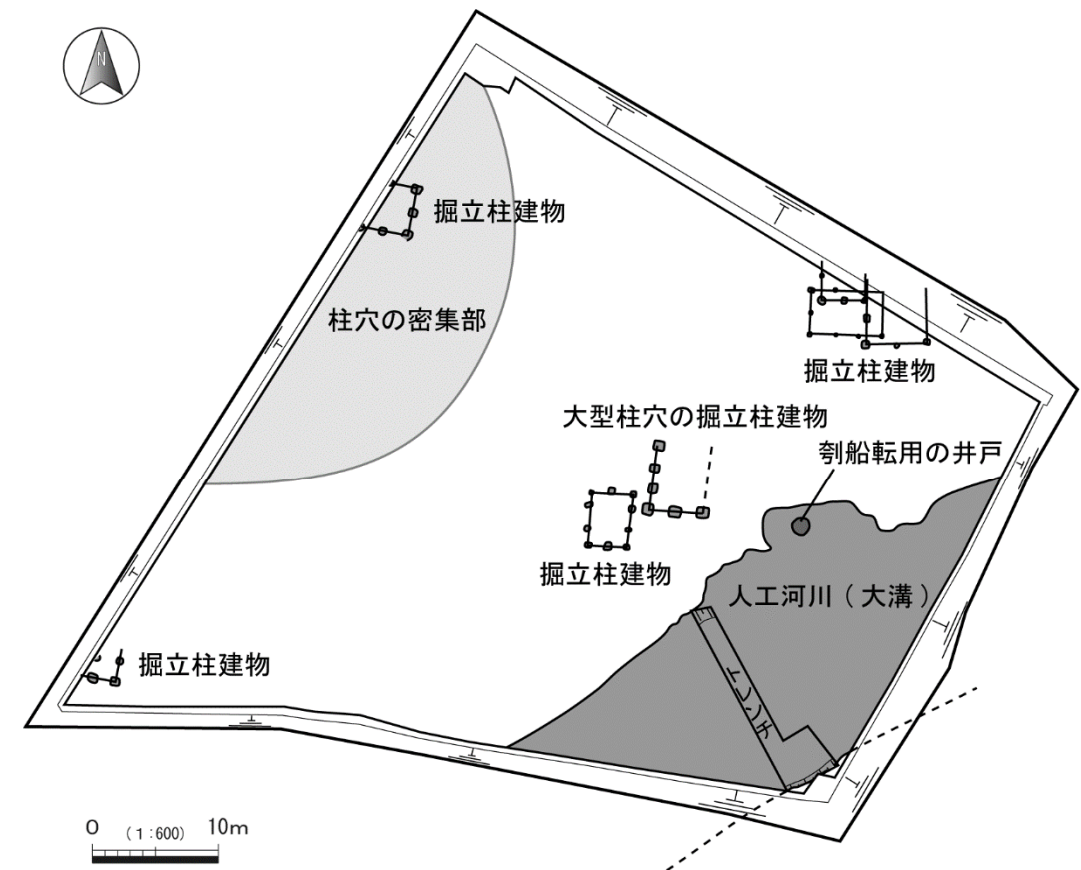
八尾市教育委員会と（公財）八尾市文化財調査研究会では、平成27年度から曙川南土地区画整理事業に伴う東弓削遺跡、弓削寺跡の発掘調査を継続して実施しています。

平成28年9月に由義寺に関連すると考えられる奈良時代後期の瓦が多量に出土し、平成28年11月から実施した確認調査で、一辺約21m（天平尺の70尺）の正方形の塔の基壇を確認しました。基壇の規模や鎮壇具から、『続日本紀』の神護景雲4（770）年に記録のある、称徳天皇と法王道鏡が建立した由義寺の塔跡であることが明らかになり、建っていたのは七重塔であろうと推定されました。また、同時に建設が進められていた由義宮の実態が今後明らかになるのでは、との期待も高まりました。

今回の調査区は、塔跡から北東に約500mの場所で、調査面積は約2,950㎡です。奈良時代から中世にかけてのたくさんの遺構が検出されました。以下、奈良時代の遺構に限り説明します。



東弓削遺跡・弓削寺跡遺構配置イメージ図



奈良時代の遺構配置図

2. 調査結果

奈良時代の遺構

ほったてばしらだてものあと
【掘立柱建物跡】由義宮に関連する建物である可能性の高い東西南北の正方位を持つ掘立柱建物跡が複数検出されました。柱の掘形は一辺60～80cmの隅丸方形、柱径が20～25cmあるかなり大きな建物で、掘形のひとつから和同開珎1点が出土しました。建物の規模や構造はまだ明らかになっていません。

【人工河川(大溝)跡】調査区南寄りで見出された西南西から東北東に流れる大規模なものです。上部の幅は16～20m、深さは少なくとも1mあると思われます。河川の肩の部分には鋤のような工具で掘った跡が残っており、存続期間が短かったことを示しています。この人工河川は、本調査区の南約140mの地点で見つかった南北方向の大規模な人工河川と一連のもので、位置関係から、玉串川を分流して掘られたものであることは間違いのないと思われます。

上層から奈良時代後期の土器とともに平安時代初めごろの土器が出土したことから、埋没した時期は8世紀末から9世紀初めごろと推定されます。

この人工河川(大溝)の性格としては、由義宮、由義寺造営のための資材運搬用運河、あるいは河川改修工事のための排水用バイパスという二つの用途を考えています。

宮殿造営のための運河の例としては、藤原宮中枢部の下層を南北に貫くものなどがあります。

くりぶね
【割船転用の井戸】人工河川(大溝)の北側で見出された井戸に、準構造船の割船の一部を切断したものが井戸枠として転用されていました。部材は舳先に近い部分で、最大幅約100cm、舳先の幅約60cm、厚さ10～14cmあります。ほかに幅約55cm、厚さ約4cmの板材2枚を組み合わせてあります。板材は割船の上部に取り付けられていた舷側板だった可能性があります。時期は奈良時代後半と推定されます。

井戸枠に転用された奈良時代の割船は、同じ八尾市内の萱振遺跡でも出土しています。



大型柱穴の掘立柱建物（北から）



割船転用井戸（東から）

3. おもな出土品

今年2月の現地説明会で報告した由義寺塔跡の出土品を別としても、由義宮・由義寺の存在を裏付けるような数々の遺物が出土しました。

今回の調査区では、奈良時代から平安時代の貨幣、銅製帯金具（巡方）、滑石製の「権」（秤の重り）、墨書土器などがあり、これまでに調査を終了した地区からは、瓦の可能性のある奈良三彩の破片、須恵器円面硯、須恵器薬壺、由義寺塔跡のものとは特徴が異なり宮殿に使用されたと考えられる瓦など、多彩な遺物が出土しました。

4. まとめ

今回の調査では、由義寺と同様続日本紀に「西京」と記録されながら実態がわかっていなかった由義宮の一端に触れる成果が上がったと考えています。本調査区の東には玉串川の旧流路があって広い土地が確保できないことと、検出された建物跡が宮殿の中心的な殿舎にしては規模が小さいことなどから、ここが由義宮の東限に近い場所であると推定されます。



和同開珎



神功開宝



隆平永宝



奈良三彩陶器片



銅製帯金具（巡方）



滑石製「権」